

学 位 請 求 論 文 要 旨

佐多稲子論  
——社会的弱者表象の展開——

2020年7月

城西国際大学大学院 人文科学研究科  
比較文化専攻

王 晶

本研究は、佐多稲子文学の先行研究を踏まえ、作品を作者から独立させて緻密に分析する作品論の方法をとった。視点としてはフェミニズム/ジェンダー批評、ポストコロニアリズム、民主主義などの理論を用い、従来あまり研究されてこなかった各時期の主要作品を中心に 12 編を取り上げ論じた。本研究を四章に分け、一章 3 編ずつの編成で、少女労働者としての出発や家父長制への抵抗から、女性解放への目覚めを経て、植民者へ立ち向かう人々の苦境、更に、周縁化された一般労働者の切なさへと、佐多文学における弱者への視野の広がりを辿りながら、弱者は社会的弱者でありながら、実は人間的強者であるという内実を検証した。

## 1. 論題選定の動機

本研究は、佐多稲子文学における社会的弱者表象の展開を視座に論を展開した。プロレタリア文学者として位置付けられた佐多稲子（1904 年～1998 年）は、自分自身の経験に取材した初期の文学から、視野を一般大衆へ広げ、体験を越えた文学を書き続けた。

佐多の作品は通時的に見ても共時的にみても、いずれも、底辺をさまよい、社会的強者に翻弄され、権力の圧迫を受けた、いわゆる社会的に弱い人間が歴史の激動の中をいかに潜り抜けて生きているかを主眼に据えて、挫折や不運から立ち直り、難所を乗り越えて前へ進み、積極的に未来へ希望を抱く人間的「強者」として捉えられている。しかも、佐多稲子文学における弱者表象を通して、近代日本の激動期の苦難な道のりを照らし、民衆へのまなざし、作家としての自己凝視と自己省察という誠実性、そして戦争や貧困のどん底、障がいなど極端な境遇に置かれた人間の哀れさ及びそれらの現実への抵抗が読み取れる。さらに、これらの解読により、様々な危機を迎えている今の時代に通じる、経済発展の中の歪みや戦争・原爆などによる弱い国、弱い市民の被害の甚大さを訴えかけ一極体制、人種差別、階級差別、格差の危険性などを呼び掛けていることを明らかにすることをめざした。

## 2. 研究の目的と意義

佐多稲子は作家としての自己の道を歩き始めて以来、当時の社会の現実の影を、色濃く反映する作品を書き続けている。佐多稲子文学の根底にあるのはリアリズム精神であると言える。従って、佐多文学を貫いた社会的弱者表象を研究することにより、近代日本の歩んだ道、社会体制、そしてその体制により、弱い立場に立つ民衆に与えた苦難、とりわけ、戦争による被害など、佐多文学の剔抉し提示した表象が歴史の鏡と証言になることを明らかにする。市民運動、労働組合、核・戦争、フェミニズム/ジェンダー、人種、貧困、格差、障がい、子供などをめぐる、弱い立場に立つ人間の直面している問題は現代にも通じるため、現在への戒めと示唆を与えてくれる。

## 3. 論文の構成と内容

序章では、図表により佐多稲子文学の業績や先行研究を分類してまとめたうえ、本研究の目的と意義を明らかにし、佐多文学と社会的弱者の関連性を述べ、文学史上の位置づけと「弱者の文学」としての妥当性を確認して本研究独自の研究視点を提出することを試みた。

第一章では、一貫した少女労働者への描写に光を当て、戦前、戦時中と戦後の作品——「キャラメル工場から」「満州の少女工」「水」を取り上げて、多重の抑圧に対する忍従から抵抗へと立ち上がり、現実の苦難に負けずに、未来に希望を抱くことのできる人間的強者の少女成長物語として捉えた。とりわけ、従来は佐多の戦争協力を示したエッセイとして評価されてきた「満州の少女工」を、他人の弱みに付け込んで、幼い少女、しかも障がい者ばかりを集めて安く使う植民者のやり方の卑劣さと搾取を暴露していると読み解いた。他方、蔑視を受け、平等視されない少女たちが、障がいを持つことで劣等を感じず、かえって真っ赤な口紅が象徴している楽観的人生観、俳優のプロマイドに託する未来への希望、権力者を恐れぬ抗議を浮彫にしたと、弱者の抵抗の側面から新たな評価を提起した。

第二章では、戦時中に書かれた 12 編の長編から「乳房の悲しみ」「女三人」「気づかざりき」の 3 編を取り上げて、フェミニズム／ジェンダーの視点から目覚めた女性の自己実現にメスを入れた。佐多文学が現しているフェミニズム／ジェンダーは、必ずしも女性を男性と対立する存在としてはみなさず、「母性を否定する」「女の男並み化解放論」などの伝統的女権主義ではない。むしろ両性ひいては人間のそれぞれの個性を認めて尊重することにより、女性の解放を求める人間的解放という調和型である。日中戦争が勃発し、ファシズムによる弾圧が激しくなるなかで、恋愛・家庭・仕事をめぐりいわゆる通俗小説を執筆することは、ある意味では戦争の本質を知り切っているかつてのプロレタリア文学者の逃げ道ともいえる。戦争の緊迫する情勢とは関係ないようなのんびりした筆致だが、その中に潜んでいる戦争批判のモチーフを見逃してはならないと指摘した。

第三章では、「白と紫」「旅情」「髪の歎き」を取り上げて、ポストコロニアリズムの視点から、植民地化された「外地」——朝鮮、「満州」、「南方」の植民者や被植民者の苦境をめぐって論を展開した。従来、戦争協力文学として批判されてきたのに対して、厳しく弾圧されたプロレタリア作家として、帝国主義の本質を洞察しながらも、生きていくうえで、「面従腹背」というより、むしろ迂回するという筆致で、作品の随所に侵略戦争が自他国の人々に与えた被害を訴えて、植民者の罪悪を問い、戦争反対を隠しながら照射していると論じた。

第四章では、「三等車」「泥人形」「黄色い煙」を取り上げて、民主主義の視点から、戦後のマージナルな人々の切なさへの凝視を通して社会的弱者の生き方と心理を深い愛と共感をこめて洞察して描出していることを論じた。佐多は彼らに対して絶対批判的あるいは救済者の筆致で描いたのではない。しかも善し悪しの判断も下さなかった。また感傷に流されないで、一定の距離感を保ち、比較的客観視して冷静に描き上げた。一見平易そのものであるが、実にそれらの人々に不運を与えた社会制度への批判も含め、彼らの生き方への認識があり、さらに社会の実態をのぞかせていると述べた。

#### 4. 本研究論文の独創性

まず、本論で取り上げた 12 編は、「キャラメル工場から」と「水」のほかは、あまり研究されていない作品である。特に「満州の少女工」「旅情」「泥人形」「三等車」についてはまだ本格的

な論が展開されていない。このような未開拓の分野について、弱者という一貫した問題意識から、近年の新たな研究方法を導入し、新たな作品分析を行うことで、佐多稲子研究を進展させたと自負している。

次に、従来の研究は一つの論点をめぐって、一つか二つの作品を中心に研究を行う傾向が見られた。長谷川啓、小林裕子、北川秋雄、小林美恵子などの単行本研究書も、それぞれ異なる視点から論を展開している。本研究は、「社会的弱者表象」という一つの焦点をしぼり、12編の作品分析を通して佐多稲子文学全体を貫く基層的なものを照射し、その文学的意義を解明した。

更に、佐多文学は社会的弱者がいかに強くなるかの文学ではなく、弱者が弱者であることを認めながら、いかにして不合理な社会体制に抵抗し、自己を主張して強靱に生きていくかを描いた文学であると指摘した。弱者は弱者であることを認めて、無理に強者になるように強いられないことこそ、真の意味での民主主義社会であるという上野千鶴子の指摘に共感する。これは大変意義深い課題であり、佐多文学の生命力の奥深いところであると再評価した。

## 5. 結論

本研究は歴史の流れの中、あくまでも底辺を生活している社会的弱者としての一般庶民の生活を、家父長制への抵抗、女性解放への目覚め、植民者へ立ち向かう人々の苦境、そして、貧困線をさまようマージナルな一般労働者の切なさという視角から描いた佐多稲子文学を検討した。つまり、「社会の中で優位な立場に立ち、それを利用して生きていく人間の姿を描く」「強者の文学」に対して、社会の中で劣位の立場に立った人々が社会・権力者と対峙し、対峙する中で体験する苦悩、哀しみ、切なさ並びにやるせなさを細かくリアルな筆致で描き出しながら、主人公には悲観的ではなく、明るい未来を託して、強靱に生き抜いている人間的強者として描出していることを検証した。

人間は環境や条件によっては誰でも弱者になりうる。あらゆる人間は脆弱で、依存を免れないことを人間の基本的条件と位置づけられている。と同時に相対的に独立した個体の生命である。弱者の文学は、弱者のアイデンティティを尊重し、絶えず苦しい環境に生きている人々に未来への希望を与え、人生の困難を乗り越える力を与えるものである。佐多稲子は人間の哀れさを掘り下げる筆致で、弱者の生き方や複雑な心情を深い共感と理解をこめて描きながら、弱者にもたらした時代や社会制度の不合理と、人間性の醜悪さを逆照射して訴えることにより、作家としての使命を果たしたという結論を導き出した。